

4年生児童における学びのサイクルを活用した 学級集団づくりに関する事例的研究

渡邊 正博*・中村 友貴**・赤坂 真二***

(平成26年9月29日受付；平成26年11月5日受理)

要 旨

本研究では、学級集団づくりが重要な課題となっている現代において、親和的な学級集団の形成に有効な教師の働きかけを考察することを目的とした。その結果、4年生の学級において「目標設定→体験→振り返り→一般化」の学びのサイクルを活用した取組を行ったことが学級満足度の向上に影響を与えたことが示唆された。

KEY WORDS

うまく機能しない状況の学級 学級集団づくり 学級満足度 4年生 学びのサイクル

1 問題と目的

文部科学省（2008）の答申では、情報化、都市化、少子高齢化などの社会状況を背景に、生活体験の不足や人間関係の希薄化、規範意識の低下等が顕著になっており、好ましい人間関係を築けないことや、望ましい集団生活を通じた社会性の育成が不十分な状況が見られると報告している⁽¹⁾。このような現状は学校現場にも表れており、全国の学級の状況について、国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2005）の調査では、平成10年前後から、小学校において授業中の私語、学習意欲の低下、教師への反抗など、授業が成立しがたい状況が表れ、学級がうまく機能しない状況が一部で見られるようになったと報告している⁽²⁾。このように、教育現場では学級づくりが重大な課題となっている。

上記の調査を受け、横浜市教育委員会（2005）が独自に行った「正常な学級活動ができない状態になった学級」についての調査結果（図1）によると、その数は、93学級にのぼり、そのうち4年生以上の学級が65学級と全体の約70%を占めている。また、1～3年生までは、ほぼ一定であるが、4年生を境にして認知数が2倍近くに上昇している⁽³⁾。「正常な学級活動が出来ない状態になった学級」とは、学級全体が、一定期間以上、集団としての授業規律を失い、正常な学習活動ができない状況にあったものとしている。ただし、一部の児童の問題行動による授業妨害や突発的なものは除く。

このよううまく機能しない状況の学級の認知数が上昇し始める4年生とはどのような特徴があるのだろうか。古荘（2009）は学校におけるいじめ問題を取り上げ、子どもは小学校3、4年生頃から、さまざまな方法で少数派や意見の合わない同級生を排除していくようになると指摘している⁽⁴⁾。また渡辺（2011）によると、9歳、10歳という年齢は、10代への入り口であり、「具体的な考え方から抽象的な考え方へ変わるとき」「親子関係から友達関係が大事になるとき」「第二次性徴のはじまるとき」「複雑な感情に気付くとき」といった、「さまざまな変化のある大事な時期」であることが分かる。渡辺は、この時期に社会性と道徳性の基盤をつくっておくことが、後にやってくる思春期の荒波を越えていくうえで、非常に大事なことであると指摘している⁽⁵⁾。そして、高橋（2010）は、将来、学校を中心として活躍する高学年としての姿を具現化するためには、中学年から集団活動の中で、自分から行動する大切さや、協力して活動を成功させるすばらしさを、実感する機会の設定が必要であると述べている⁽⁶⁾。

以上のように、4年生という発達段階の児童の集団づくりや学級づくりが重要であるといえるが、先述の横浜市教育委員会の調査のように4年生を境に学級がうまく機能しなくなる事例が増えるという現状がある。したがって、4

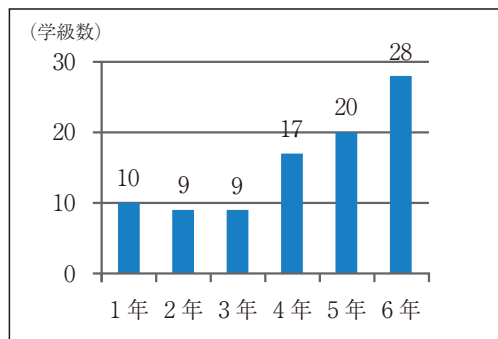


図1 正常な学級活動ができない状態になった学級（横浜市教育委員会）

年生の児童の特性を捉えた学級集団づくりを検討することが、学級崩壊の予防・回復への寄与につながるといえる。心理アセスメントとして広く知られるQ-Uを開発した河村（2010）は、学級集団の発達段階を表1のような5段階（混沌・緊張期～自治的集団成立期）に分け、第4段階（全体集団成立期）以上の状態の学級の比率が半分を割っており、1年以上経っても、第2段階（小集団成立期）の状態の学級が3割あると日本の学級集団の現状を示している⁽⁷⁾。

表1 学級集団の発達過程（河村 2010）

第1段階 混沌・緊張期	<ul style="list-style-type: none"> 学級編成直後の段階で、子ども同士に交流が少なく、学級のルールも定着しておらず一人一人がバラバラの状態 集団への所属意識も低い 学級集団は堅苦しい雰囲気 他の子と表層的なつき合いを試してみたり、教師を知るために試し行動を行ったりする子が見られる 	無秩序の状態
第2段階 小集団成立期	<ul style="list-style-type: none"> 学級のルールが徐々に意識され子ども同士の交流も活発化してくる その広がりには気心知れた小集団にとどまっている状態 学級内では、一定の安定に達するまでに、小集団同士の引っ張り合いやトラブルがよく見られる状態 	ルールの確立 30%
第3段階 中集団成立期	<ul style="list-style-type: none"> 学級のルールがかなり定着している 小集団同士のぶつかり合いの後に一定の安定に達した状態 リーダーのいる小集団などが中心になって、複数の小集団が連携できる 学級の半数の児童が一緒に行動できる そういう学級全体の流れに反する子どもや下位集団が明確になる時期でもある 	ルールの確立 60%
第4段階 全体集団成立期	<ul style="list-style-type: none"> 学級のルールが児童にほぼ定着し、一部の学級全体の流れに反する子どもや小集団ともある程度折り合いがつく 児童がほぼ全員で一緒に行動できる 	ルールの確立 80%以上
第5段階 自治的集団成立期	<ul style="list-style-type: none"> 学級のルールが児童に内在化されている 一定の規則正しい全体生活や活動が、温かな雰囲気のなかで展開される 学級の問題は自分達で解決できる状態 児童の中から全体の意欲を喚起するような行動も起こる 自他の成長のために協力できる状態 	ルールの確立 80%以上で分散が少ない

このような現状の背景として、河村（2012）は、現代の教師たちは従来型の理想の学級集団の形成を目指すものの、現代の児童の実態に応じて、どのように学級経営を展開すればよいのかという方法論が見いだせないまま、多くの教師たちが苦戦しているのではないかと述べている⁽⁸⁾。

また、河村（前掲）は、第5段階の自治的集団成立期の状態の学級集団を、学級内の規律を表すルールと学級内の親和的な人間関係を表すリレーションが統合されて成立している満足型の学級集団としており、Q-Uの学級満足度を向上させていくことは学級集団の発達を促していくことだとしている⁽⁹⁾。

以上のことから、学級づくりが重要な課題となっている現状において、児童の実態に合わせた指導法を模索するために、学級満足度が向上していく学級の形成過程に注目していく必要があると考える。では、4年生において、どのような取組が有効なであろうか。

滝口ら（2014）は、小学校中学年の仲間集団の特徴と変化に着目し、中学年から高学年にかけて、学校での学習や行事などで友達と一緒に活動することが仲間との関係を深めていくことを明らかにした⁽¹⁰⁾。また山中（2011）は「林間学校」「運動会」「音楽会」などの学校行事において、実施前に数回の集団活動スキルとコミュニケーションスキルのエクササイズを行ったところ、児童の精神的充足と社会的適応力が高まり、集団活動やコミュニケーションスキルが上昇したと報告している⁽¹¹⁾。これらの研究から、中学年以降の学年では、学校行事などの集団活動を積極的に活用していくことが児童の発育発達に有効であることは明らかとなった。しかし、学級集団づくりにおいて学校行事と学級満足度との関連についての調査をした研究は見られない。

そこで本研究では、学級がうまく機能しなくなる可能性が高まる4年生において、学校行事や集団活動を積極的に活用した取組を行い、アクションリサーチの手法に基づいて介入する中で、どのような働きかけが4年生の学級満足度の向上に有効であるか考察することを目的とする。

2 方法

2. 1 調査の対象

2. 1. 1 学級

新潟県A市立B小学校 4年C組 (24名) 学級担任D教諭

筆者ら(現職派遣院生2名, 学卒院生2年)の観察から, 学級内の目立ったトラブルや問題は認められないが, 児童同士のかかわりが薄く, 担任主導で学習や学級生活が進められている様子が見られた。

2. 1. 2 担任

担任であるD教諭は20代前半の女性で, 新採用2年目である。講師経験はない。本学級は持ち上がりであり, 担任と児童のトラブルはなく, 担任と児童の関係は良好であると, 筆者らの観察から判断された。

2. 2 フィールドワークを行った時期

2013年8月28日～2013年12月20日

2. 3 評価の材料

Q-Uを2回実施(5月と12月)

支援中の教師の働きかけと児童の特徴的な様子をフィールドノーツに記録

教室後方にビデオカメラを設置し, 授業の様子を撮影

打合せ, D教諭へのインタビューをICレコーダー及びメモに記録

自由記述式の児童アンケート(11月)

2. 4 学級への介入方法

学級の改善に向けた介入手続き及びリフレクションの設定については表2のように行った。

表2 学級への介入期間と支援の概要

介入期間と支援の概要			リフレクションの設定	
1期	夏季休業中	筆者, 大学院生EがD教諭と協議し, 支援プランを作成	支援者と担任	D教諭, 学年主任F教諭, 筆者, 大学院生Eの4名で, 学年会として週1回実施
2期	夏季休業後	支援プランに基づき, 筆者と大学院生Eの2名で週3回介入	支援者間	支援日外に上越教育大学にて大学院生, 学部生, アドバイザー(大学教員), 大学院生Eが取組みについて検討。週1回実施

2. 5 支援の概要

2. 5. 1 支援プラン

以下が, D教諭と夏季休業中に協議して作成した支援プランである。なお, 作成に当たっては, 赤坂(2012)⁽¹²⁾が提案する学級づくりの目的達成のための戦略図を参考に行った。

「目的地」とは理想とする学級の姿で, 「現在地」とは学級の実態である。授業や活動をうまく機能させるには, 最低限, 目的地の設定と現在地の把握が必要であるとされる。そこで, 筆者と大学院生Eは担任か

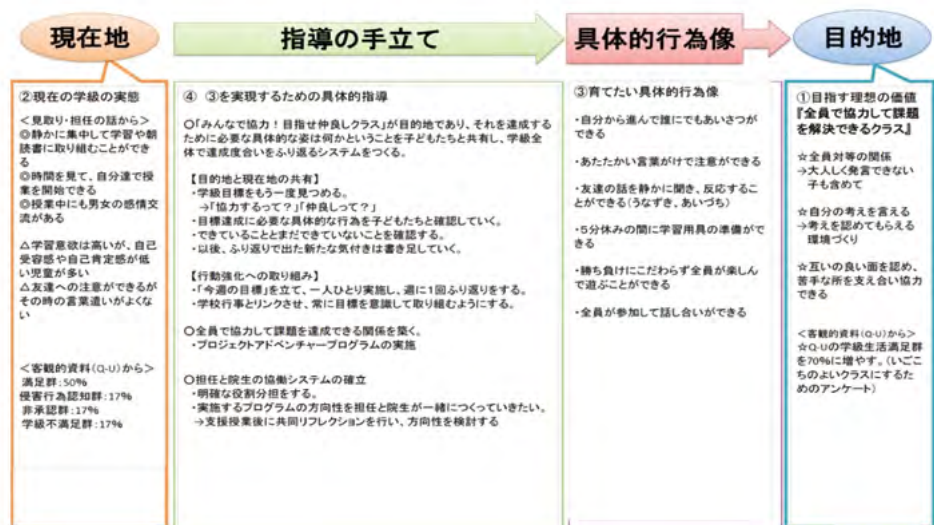


図2 支援の戦略シート

ら、理想とする学級の姿（目的地）と学級での児童の様子（現在地）について聞き取りを行い、筆者が原案を作成し、大学院生Eと検討した上で担任に提案した。

河村（2012）は、学級目標やルールが児童に内在化されていないと、小グループ同士で拮抗してしまうなど児童同士の良好な関係が築けないとしている⁽¹³⁾。対象クラスの学級目標は「みんなで協力 目指せ！仲良しクラス」である。担任の話によると、この目標は児童全員で考えた目標であるが、1学期は活用する機会はなかったとのことだった。そこで目的地の設定に際して、筆者は学級目標に着目した。学級全体で目指す目標を明確にし、それを土台とした上で、学級全体で目標に向かい、様々な課題を解決していくことで仲間意識や児童同士の承認感を高めていく。そのような経験を積み重ねる中で、学級にあたたかい雰囲気醸成し児童同士の良好な人間関係づくりを目指すこととした。

2. 5. 2 学びのサイクル

目的地である「全員で協力して課題を解決できる」という学級集団を形成するために、児童に課題解決の体験を積ませる必要がある。課題解決の活動には、構成的グループエンカウンターやグループワークトレーニング、プロジェクトアドベンチャーがある。構成的グループエンカウンターは、「エクササイズ（活動）→シェアリング（共有）」という流れで行い、グループワークトレーニングは「実習→振り返り→分析→一般化」という流れで行い、プロジェクトアドベンチャーは、「目標設定→体験→振り返り→一般化」という流れで行う。この3つの手法を比べたときに、これらの手法に共通しているのは、「体験」「振り返り」「一般化」のプロセスにおいて体験から学んだことを共有し、次の活動につなげているということである。

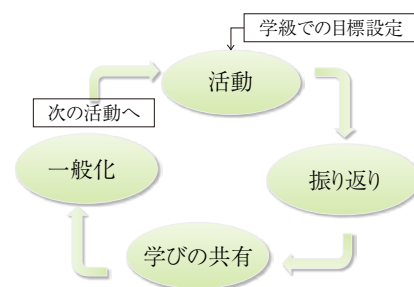


図3 学びのサイクル

そこでこのプロセスを参考に、図3のようなサイクルを作成し、実践の中心に置いた⁽¹⁴⁾。それを学びのサイクルと呼ぶこととする。活動に際し、個々に目標を立てて臨み、そこで起こったことを振り返る。次にその中で得た学びの共有を行う。そして学びが様々な場面で活用できるように一般化を図る。このサイクルの活用によって児童は目標を明確に意識するようになり、学びを振り返ることで、自分たちの成長を実感できると考えた。また、この学びのサイクルを生かすための場として、教科活動の中でも集団での課題解決活動を設定した（表3）。

表3 課題解決の活動一覧

教科	活動名	教科	活動名
行事	米山登山を成功させよう	学活	協力ゲーム①（ワーススピード）
行事	マラソン大会に向けて	学活	協力ゲーム②③（パイプライン）
行事	縦割り遠足に向けて	算数	協力して全員が問題に正解しよう①②
図工	班で協力 探検島づくり	算数	1㎡の中に何人入れるかな

3 結果と考察

3. 1 分析1 学級の変容

3. 1. 1 目的

学級の変容について分析することにより学級集団づくりの取組がどのように効果を上げたのかを検証する。

3. 1. 2 分析方法

学級の変容についてQ-U及びD教諭へのインタビュー記録から変容を把握する。

3. 1. 3 学級の変容

Q-Uの結果、学級生活満足群の割合が50%から83%、侵害行為認知群の割合が17%から8%、非承認群、学級生活不満足群の割合が、それぞれ17%から4%に変化した。また田中らが開発したjs-STAR2012統計プログラムを用いてQ-Uの各項目の分散分析を行った結果、下位尺度である「承認得点」「被侵害得点」、また児童のリレーションに関係すると考えられる学校生活意欲尺度の下位項目である「友達との関係」において5%水準で、また「学級の雰囲気」において1%水準でどちらも有意な変容が認められた（表4、5）⁽¹⁵⁾。

表4 Q-Uの学級満足度尺度（下位尺度）

項目	5月		12月		分散分析F比
	Mean	S.D	Mean	S.D	
承認得点	18.91	3.78	21.29	2.47	12.99**
被侵害得点	9.95	3.23	7.62	2.35	12.77**

表5 Q-Uの学校生活意欲尺度（下位尺度）

項目	5月		12月		分散分析F比
	Mean	S.D	Mean	S.D	
友達との関係	10.45	1.65	11.25	1.05	5.58*
学級の雰囲気	10.62	1.37	11.54	0.70	11.09**

河村（2004）は、学級内の70%の児童が学級生活満足群にプロットされている状態が、望ましい学級集団の状態であると述べている⁽¹⁶⁾ことから、かたさの見られる集団から満足型の集団へ学級が変容したことが推察される。河村（2012）は、満足型の学級集団を、第5段階の自治的集団成立期の学級集団とすると述べており⁽¹⁷⁾、表1の学級集団の発達過程によれば、第3段階の中集団成立期であった学級が、12月には第5段階の自治的集団成立期に近づいてきた可能性が示唆される。

次に、学級集団づくりにおける二学期の児童の変化について、戦略シートと児童アンケートと担任へのインタビュー（12月20日実施）をもとに、9月当初との比較を行った。表6は、担任と筆者と大学院生Eで協議した際に、担任が「達成できた」と話した具体的行為像である。このように、児童同士でほめ合ったり励まし合ったりする姿や全員で遊んだり話合いをしたりする姿、また互いに注意し合ったりする姿が見られるようになったことから、学級内にリレーションが高まっている可能性が示唆される。

表6 達成できたと考えられる具体的行為像

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ① 失敗を責めずに励まし・応援ができる。 ② 自分の意見を恥ずかしがらずに言える。 ③ 児童同士での「すごいね・いいね」等のあたたかい声かけができる。 ④ 全員で楽しんで遊ぶことができる。 ⑤ 全員が参加して話合いができる。 ⑥ あたたかい言葉で注意できる。 ⑦ みんなで注意し合うことができる。 ⑧ 注意されると素直にきくことができる。 |
|--|

3. 2 分析2 観察記録

3. 2. 1 目的

学級の変容において学びのサイクルがどのように関連していたかについて検討する。

3. 2. 2 分析方法

フィールドノーツより、学びのサイクルを活用した取組の観察記録と学級の変容とを関連付けながら学びのサイクルの有効性を検討する。

3. 2. 3 行事における学びのサイクルに関するエピソード

<エピソード1 米山登山>

<p>9月5日 フィールドノーツより</p> <p>①4限の学活では明日の米山登山にむけての個人目標を立て、クラス全員で共有した。8割の児童が、クラスみんなのために頑張りたいことを決めることができ、全員の前で宣言することができた。特に特別支援学級在籍のE児が自分の意志で目標を決定し、自分から立ち上がって宣言したのは感動的な場面であった。</p>
<p>9月17日 フィールドノーツより</p> <p>米山登山が無事終わったとうかがった。②先週クラスで決めためあて通り、励まし合い、あきらめずに登っていた子どもたちの姿があったとのこと。児童同士の「がんばれ」「あと少し」「だいじょうぶ？」などの励まし・応援の声掛けがたくさん見られたようだ（引率教員の観察より）。</p>
<p>9月18日 フィールドノーツより</p> <p>③米山登山のふり返りで、「友達のよい姿」「これから大切にしたいこと」がたくさん出された。その中で児童全員が、これからクラスで大切にしたいことを発言した。その後、ピーニングには④「あきらめない」「あいさつ」「励まし・応援」「目標を立てる」「アドバイス」「あたたかいメッセージ」の言葉が加わった。</p>

<エピソード2 マラソン大会>

9月25日 フィールドノーツより マラソン大会に向けたためあて作りを行った。⑤米山登山での学びであった「応援する」「励ます」という姿をマラソン練習や本番でがんばることになった。
10月1日 フィールドノーツより マラソン大会の本番。走るのが遅く毎回練習で周回遅れになるG児に伴走した。そのG児を追い越す際に「ファイト」「がんば」と声をかけていく児童が6人いた。
10月1日 G児の振り返りシートより みんなが越していく時に「がんばれ」と応援してくれてうれしかったです。がんばろうと元気が出ました。
10月3日 フィールドノーツより ⑥マラソン大会のふり返りの際に、学級担任は「応援・励まし」に関しての賞賛をするだけでなく、3年生の感想作文を引用して、下級生からあこがれている事実を紹介した。そしてピーニングの中に「下級生の手本」というキーワードを追加することになった。また、⑦次週の全校行事「秋の一日（縦割り班遠足）」の目標設定に向けた前振りを担任が意識的に行った。マラソン大会で獲得した学びを次の行事へつなげていくサイクルを担任が意識的にいけるようになったことは大きな成果である。

下線①②③④からは「目標設定→体験→振り返り→一般化」という学びのサイクルが回っている様子が見える。また下線⑤⑧からは9月の米山登山を皮切りに、全体の学びを次の行事につなげるというサイクルが回っている様子が見える。そして目標設定（下線①⑤⑥）・振り返り（下線③④⑥）の両場面において、担任は児童の声を大切に進めている。さらに担任は児童のよさを価値づけ、前後の行事での活用を図れるような投げかけをしていることが分かる。

このサイクルについて担任は、介入後、次のように語っている。

12月20日 担任インタビューより やっぱり目標を立てて、振り返って、次に生かすっていう単純なサイクルだけど、それを確実に着実にやっていけるとやっぱり子どもの自信とか力につながるな〜っていうのがすごく収穫です。
--

担任がサイクルの有効性を自覚して行うことができたことで、このサイクルが円滑に回るようになったことが考えられる。河村（2012）は、行事を学級全体で取り組み、個人の振り返りと学級集団としての意味を問う全体の振り返りを行い、協力の喜びや支え合ったことの嬉しさを共有し、みんなで取り組んだからこそできたことを評価することで集団の一体感や準拠性が高まると述べている⁽¹⁸⁾。サイクルによる連続的な学びが学級の中で生み出されたことが、学級の一体感や準拠性を高め、学級の一員としての所属意識、教室での安心感へとつながっていったと考えられる。

3. 2. 4 学活における学びのサイクルに関するエピソード

<エピソード3 学活「ワープスピード」>

10月8日 ビデオ分析より 学活の「ワープスピード」では、チャレンジ1回目は53秒であったが、3回目は30秒とタイムが短縮した。学級児童21人（全23人）が活動し、ポルトスに励ましや賞賛の声をかけていた。⑧目標設定場面では、自発的に出たリーダーが話し合いを仕切り、その場にいた児童も全員の意思を確認して、目標を決定した。チャレンジ中の失敗時に「あ〜」というため息がもれ、失敗に絡んだ児童が泣き出すことがあった。すぐに周りの児童が「ドンマイ」「おいしい」などの声をかけたが、2人の女子が泣いて参加できなくなった。
10月9日 フィールドノーツより ⑨昨日行った学活「ワープスピード」の振り返りを行った。ビデオ映像を皆で見ながら教師が賞賛する形式をとった。昨日の5限は校内研究授業の時間であり、担任は他クラスに行っており児童の様子を見るのはビデオが初めてであった。見た後の「担任からの一言」では、児童に以下の言葉をかけた。 「今までは『先生、何秒がいい〜』と言うだけで先生がみんなの意見をまとめて決めていました。でも今回はどうだった？先生に頼ることなくみんなの力だけで決められたよね。それにそこには全員の意見がしっかりあったよね。3年生の時に比べてとっても立派になりました。先生はそのことにすごくびっくりしたし、感動しました。とっても嬉しいです。」
10月16日 フィールドノーツより 終わりの会の良いところ見つけの活動中のことである。男子児童Jがこんなことを発表した。 ⑩「今日の終わりの会は、先生が何も言わなくても静かにできていたのでよかったです。」 終わりの会の開始時には、担任が声をかけることなく、子どもたちだけで始めていた。また終わりの会の間は、担任はしゃがんだ状態で特別支援児の対応をしていて、他の児童からは顔が見えなかった。そのようなこともあり、児童から上記の発表があったと考える。

下線⑧⑨⑩を見ると、学びのサイクルが回っていることが分かる。エピソード1から1か月経過しているが、この活動では「児童同士で目標設定すること」ができた。さらに、終わりの会の中で児童の中から主体性に関する価値づ

けの発言が生まれている。このことから、児童の中にも学びのサイクルが意識されてきていることが推察される。

3. 2. 5 日常における学びのサイクルに関するエピソード

<エピソード4 学級目標に関する取組みについて>

9月3日 フィールドノーツより

学級目標にある「協力」と「仲良し」を具現する姿について、児童から出た意見を集約した結果、以下のキーワードが設定された。①挑戦する②手伝う③意見を言う④ケンカしても仲直りする⑤みんなで活動する⑥親切にする⑦いじめをしない

本学級は以前から終わりの会において、一日の友達の善行を発表し合いシールをためていく「よかったこと探し」の活動を行っていた。児童が意欲的に取り組んでいた活動でもあることから、「よかったこと探し」の発表の内容が学級目標のキーワードに関連していた場合には、ポスターにシールを貼った(図4)。それにより、日常生活の中にも「目標設定～活動～振り返り～一般化」の学びのサイクルが回っていた。2月に児童に行ったアンケートでは、以下のような回答が得られた。

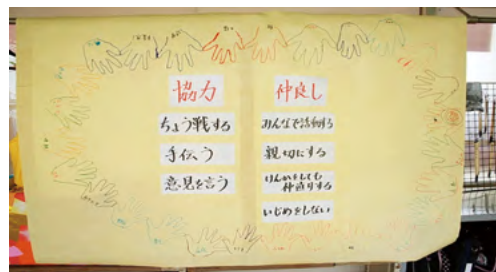


図4 作成したポスター

○ポスターによる振り返りは今後も続けたいですか。 はい 22人 いいえ 2人
理由：(はい) 自分たちの成長が実感できる、友達の良いところがたくさん見つけられる。
(いいえ) もう十分仲良しになった、ポスターがなくてもできるようになった。

このことから児童が振り返りの活動を肯定的に受け止めていることが分かる。そして、この振り返りが学級児童の良さを認め合う場となっており、個々の承認得点を上げ、被侵害得点を下げることに繋がっていったと考えられる。

<エピソード5 授業に関する取組みについて>

9月12日 フィールドノーツより

算数の授業中、折れ線グラフの作図の際に席を立てて答えを確かめたり、わからない子に助言したりするなど、男女関係なく教え合う姿が見られた。そのことについて担任と話していると⑪「一学期は同性同士でかかわり合う姿が多かったが、最近では男女で普通にかかわれるようになってきた」という言葉が返ってきた。

9月18日 フィールドノーツより

算数「折れ線グラフ」の単元。教科書の練習問題にある「表に書いてある数値を見て折れ線グラフを書こう」という問題である。これを「みんなが時間内にできるように」という課題を担任が設定した。児童の姿としては、⑫自分ができるとまだ出来ていない友達のところに教えに行くという姿や、答えを丸写しさせるのではなく分からない子にはどこが分からないのかを質問しながら、スモールステップで教えるという姿があった。

下線⑪⑫からは、児童のかかわりの質の変容が見てとれる。授業終了後、児童にこの授業についてインタビューをしたところ「いつもの個人やグループでやる授業とは違って、みんなで解決していて一丸となっている感じだった。」という答えが返ってきた。学級目標「協力 仲良し」という自分たちが目指すものに対し、日常の授業でもチャレンジしようとする姿が現れている。学級目標からの学びのサイクルが回っているということが出来る。

9月19日 フィールドノーツより

放課後の打合せで、担任が感じている児童の変容について尋ねた。担任は児童の変容について、「学級目標をすごく意識するようになった。(学級目標『みんなで協力 目指せ! 仲良しクラス』中の) みんなでっていうのが特にキーワードになっている。何をやるにもみんなでするにはどうしたらいいのか?というのを考えるようになってきた。今までも困っている人を助けたり、優しくしたりはできていたが、それで終わらずに「みんなでやる」ということを意識するようになったのが変わったところだと思う。」ということを話していた。

また、「私自身も“みんなで”ということを児童が大切にしているのので、『じゃあみんなでするにはどうする?』と声をかけることが多くなってきた。子どもと同じ方向を向いてがんばっていているかなと思っている。」と話しており、自分自身の変容についても実感を持っているようである。

以上のように、学級目標を意識させて日常の生活を送ったことが、児童の学級目標への意識を高め、目標に向かって努力できるようになったと考えられる。さらに児童の変容は、担任Dの意識の変容にもつながっている。

3. 2. 6 H児の変容に焦点を当てて

H児は、介入最初の学級での課題解決体験で学級の児童の輪の中に入らずに泣き出した児童である。このH児が介入最終週には学級の児童と同じ活動をするまでに至った過程をエピソードで分析する。

<エピソード6 H児の変容>

9月4日 ビデオ分析より

最初の課題解決体験はポスター作りで、「全員でキーワードを手形で囲む」活動をした時であった。自分の手が置き終わるとおしゃべりを始める児童、場所を取り合ってもめる児童が見られる等、トラブルが起き、途中一人の児童（H児）が泣き出した。

大きな模造紙の周りに円を作って手形を書く活動で、H児は自分が輪の中に入らずに泣き出してしまった。筆者と大学院生Eと担任が見る限りでは、特にH児を追い出そうという周りからのプレッシャーはなかった。しかし、なかなか入ることができないまま活動が進んでいく様子を輪の外で見ていて、H児は泣き出してしまった。

10月8日 学活「ワープスピード」 フィールドノーツより

課題解決のチャレンジ中、失敗した時に「あ〜」というため息がもれ、失敗に絡んだ児童が泣き出してしまった。⑬その後すぐに「ドンマイ」「おいしい」などの声をかけたが遅く、活動全体で2人の女子が泣いて参加できなくなった。

この2人の中にH児が含まれている。H児の順番で失敗をしてしまい、周りから「あ〜」という落胆のため息が漏れた。下線⑬は10月1日のマラソン大会から得た学びである「応援・励まし」の姿がだんだんと定着してきていた様子が見える。周囲の児童から「ドンマイ」等の声かけがあったが、H児はその場でしゃがみ込んでしまった。そしてそのまま活動に参加することができなかった。

10月30日 学活「パイプライン」 フィールドノーツより

活動中、前々回泣いて固まったH児が、また泣き出した（理由は今回も失敗した後の「あ〜」という声による）。そこで、担任は、児童に「前々回は泣いている子を放っておいた事実」を想起させ、H児もみんなも「チャレンジ」の場面であることを強調した。⑭その後H児に向けて励まし応援の声がたくさんかけられ、H児は活動に戻った。

前回から3週間後の課題解決体験では、前回の課題を担任が想起させた上で始めた。下線⑭のように、課題解決体験の回を重ねる度に児童は自身の行動を振り返りながら適切な行動を身に付けていった。この回の児童の振り返りシートには次のように書かれていた。

10月30日 学活 H児の振り返りシートより

私がいやな気持ちになって泣いてしまった時もみんなが「大丈夫?」、「みんな失敗はあるんだから大丈夫だよ。」とみんながはげましてくれたのでとてもうれしくなりました。

10月30日 学活 I児の振り返りシートより

みんなHちゃんが泣いてしまった時に、「みんなぜんぜん気にしてないよ!」「だれでも失敗なんてするんだから!」「大丈夫大丈夫!」とかいろいろあたたかいメッセージを言っていて、私も「みんなこんなにやさしかったんだ」と思いました。

上記は、最初の体験で泣いたH児の振り返りとその周りの児童の様子を見ていたI児の振り返りである。体験の中で、困っている人にどんな言葉をかければよいのか、どんな接し方をすればよいのかを考えて取り組んでいる周りの児童の姿があった。こうした友達の変容がH児だけでなく学級全体の安心感を生んだのではないかと考える。

10月22日 フィールドノーツより

国語の時間。全員が立ってごんぎつねを音読し、読み終わったら座っていくという活動を行っていたときである。H児が最後の一人になり、読むのを恥ずかしがる様子を見せた。しかし「一人で読むのは恥ずかしいことではないよ」という担任の言葉かけに後押しされ、H児は声がしぼむことなく、みんなに聞こえる声で読み切ることができた。そのとき周りの児童は何を言うのでもなく、その児童が読み終わるのを静かに待っていた。

これはH児が泣きやんで活動に再チャレンジできた10月30日の1週間前の様子である。皆が聞いている中、自分の声だけが響き渡る状況で最後まで読み切ることができたというエピソードである。この頃から、H児は徐々に集団の中で安心感を抱けるようになってきたと考えられる。

11月27日 フィールドノーツより

これからのクラスのことについて話し合うために、みんなで円になって座り一人ひとりがクラスのみんなへ思いを話す活動を行った。筆者たちはこれまで児童が自らチャレンジすることを大切にしてきた。最後の活動も教師が順番を決めるのではなく、児童のタイミングで立ち上がり話すという形式をとった。

最初は順調であり、同じタイミングで立ちあがってしまっても譲り合いながら一人ひとりがみんなの前で話していった。しかしその脇でなかなか言い出せない児童もいた。最後の2人となったところでプレッシャーに押しつぶされそうになったのか

2人の児童が泣き出した。3カ月の支援の中で児童が思わず泣き出してしまったという出来事は3回あった。今までであれば、泣いてしまった児童は座り込んだままで活動に参加することができなかった。しかし今回は泣きながらも立ち上がり、2人とも自分の言葉でクラスみんなに自分の思いを伝えきった。

これは最後の学級活動の時間で行った振り返り授業の場面である。プレッシャーに押しつぶされそうになったのか、このときも今までと同様にH児は泣き出した。しかし、泣きながらも立ち上がり自分の思いを伝えることができた。

9月当初は円の中に入ることさえできなかったH児が、11月の最後には円の中に入ることができただけでなく、みんなの前で発表することができたのである。これはH児自身の変容もあるが、H児と周りの児童との関係性が良好になり、そして学級全体があたたかい雰囲気になったことが要因となっているともいえるのではないか。

3. 2. 7 ハートメッセージの木の質的変容

B小学校では「相手の良いところを見つけよう」という実践を全校で取り組んでいた。学級をあたたかい雰囲気にするために、良いところを付箋に書いて学級のハートメッセージの木に貼っていくという活動である。

11月19日 フィールドノーツより

介入当初の9月にも同じ活動があった。児童が書いた中身を見てみると「○○さん 頭がよくてすごいね」「○○さん いつも優しくしてくれてありがとう」等、個人に向けたメッセージしかなかった。しかし、11月13日以降のハートメッセージの木の記述を見ると、個人に向けたものだけでなく、係やクラス全体に向けてのメッセージが見られる。

▼当番や係に向けて

「黒板消し係の人へ いつもきれいに消してくれてありがとう。」

「パーティ係のみなさん 毎回楽しいゲームをかんがえていただきありがとうございます。次も楽しみにしています。」

「パーティ係のみんなへ いつも計画を立てるときに、一緒に考えてくれたりしてくれてありがとう。私はとても助かります。」

「給食当番のみなさん いつもがんばっていてすごいね！！」

▼班に向けて

「5班の人達へ みんなのいい所をみつけるの上手だね。」

▼集団に向けて

「男子へ いつも元気に遊んでいてすごいね！いいね！」

「男子と女子へ いつも男女関係なく遊んでいるね！！」

▼クラス全体に向けて

「4年2組のみんなへ いつも仲良くして、けんかしても仲良くなれていいね！これからもよろしく！」

「4年2組のみんなへ みんな仲良しでいつも協力できる4年2組でいいね！これからもつづけよう！」

「4年2組のみんなへ ハートメッセージの木がたまってめっちゃうれしいです！」

「4年2組のみんなへ いつもやさしくしてくれてありがとう。」

このエピソードの下線部分から、4年C組の児童の中に、自分の所属している集団ではない集団への称賛が生まれたことが示唆される。前述の河村が示す学級集団の発達過程の第4段階に見られる「小集団同士のあたたかなかわり」が表出されていると考えられる。つまり、4年C組が満足型の集団に向けて発達したといえる。この質的な変容に加えて、9月に行ったときは模造紙1枚であったものが、11月に行ったときは模造紙3枚にクラスメイトの良いところが書かれた付箋が貼られるという量的な変容も見られた。

4 全体考察と今後の課題

4. 1 全体考察

Q-Uの結果やフィールドノーツ等に記されたエピソードから、3カ月のフィールドワークを通して、学校行事や特別活動の中で、学びのサイクルを活用して取り組むことは、学級満足度の向上に有効であることが示唆された。

渡辺（前掲）は、メタ認知の質的変化は9歳、10歳ごろにあるとし、ピアジェのいう脱中心化（自分の視点だけでなく他者の視点から考えられるようになること）が起り、自己の視点を相対化できると述べている⁽¹⁹⁾。とするならば、発達段階的に小学校3年生までは教師の言うことは比較的入りやすいと考えられる。なぜなら、まだメタ認知能力が育っておらず、誰が言ってもいうことを聞くという構造にあるからである。しかし、小学校4年生では、教師の言っていることを自己の視点と対比し、相対化できるようになるため、「先生はそう思っているだろうけど、私はそうは思わない。」や「A先生の言うことは聞くけど、B先生の言うことは聞かない。」等といった認知的な変化が現れてくるのではないかと。また、渡辺（前掲）は、中学年の意欲の特徴について、「人に言われるとやる気が出ない」

と答える子が多いことから、自己決定感がやる気をもつ上で重要だとも述べている⁽²⁰⁾。つまり、児童の主体性を引き出す働きかけが4年生の意欲を向上させ学級を成長・発達させるということがいえると考えられる。したがって、4年生の発達段階を考えると、教師主導のリーダーシップをとり続けるのではなく、児童の主体性を引き出すリーダーシップを発揮していくことが中学年の学級集団づくりにおいて有効だといえる。

また、教師の指導が単純に入っていない発達段階であるがゆえに、教師主導のリーダーシップをとっていると、児童に見放されて、教師の指導力の解体が起こり、学級がうまく機能しなくなることが起こっていきと予想される。そのような背景がある中で、児童を生かすリーダーシップを発揮していくことによってうまく機能しない学級が増えてくる4年生という学年の集団を安定させ、成長・発達させるためには児童の主体性が発揮される取組みを意図的に仕組む教師側の戦略が大切であると考えられる。そのような場として、学校行事やそれを連動した学習活動は有効であるとする可能性が示唆された。

4. 2 今後の課題

本研究では、4年生において学校行事や集団活動を活用し、学びのサイクルを意識して取り組んでいくことが学級満足度の向上に有効であることがわかった。しかし、介入時期が2学期に限定されていたことで、体育や音楽などの技能的な行事での活用に限られていた。儀式的行事や奉仕活動などでも同様の効果が得られるのか、また、学級の基礎をつくる1学期や学級のまとめとなる3学期にも活用できるのかなど、更なる研究を行っていく必要があると考える。

引用・参考文献およびWEBサイト

- (1) 文部科学省：「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」，
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/information/1290361.htm（2014年1月4日閲覧）
- (2) 国立教育政策研究所生徒指導研究センター：「『学級運営のあり方についての調査研究』報告書」，
<http://www.nier.go.jp/shido/centerhp/unei.pdf>（2014年1月4日閲覧）
- (3) 横浜市教育委員会：「児童・生徒指導の手引き」，
<http://www.city.yokohama.lg.jp/kyoiku/sidou1/jidoseito/shido-tebiki.html>（2014年1月12日閲覧）
- (4) 古荘純一：『日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか』，光文社，2009
- (5) 渡辺弥生：『子どもの「10歳の壁」とは何か？ 乗り越えるための発達心理学』，光文社，2011
- (6) 高橋健一：「特別活動 児童が自治的活動を行う姿を求めて－「7つの習慣」を意識した取組を柱にして」，上越教育大学
学校教育実践研究センター，『教育実践研究』第20集，pp.217-222，2010
- (7) 河村茂雄：『日本の学級集団と学級経営』，図書文化，2010
- (8) 河村茂雄：『学級集団づくりのゼロ段階』，図書文化，2012
- (9) 前掲(8)
- (10) 滝口美樹，吉川はる菜：「小学生における仲間集団（ギャンググループ）形成の特徴とその役割」，埼玉大学教育学部教育実践総合センター紀要，2014
- (11) 山中徳子：「学校行事が小学生の精神的充足と社会的適応力の継時的変化に与える影響」，早稲田大学人間科学学術院，人間科学研究，2011
- (12) 赤坂真二：『スペシャリスト直伝！学級づくり成功の極意』，明治図書，2012
- (13) 前掲(8)
- (14) プロジェクトアドベンチャージャパン：『クラスのちからを生かす 教室で実践するプロジェクトアドベンチャー』，みくに出版，2013
- (15) 中野博幸・田中敏：『フリーソフトjs-STARでかんたん統計データ分析』，技術評論社，2012
- (16) 河村茂雄：『Q-U入門』，図書文化，2004
- (17) 前掲(8)
- (18) 前掲(8)
- (19) 前掲(5)
- (20) 前掲(5)

Case study on the class management with the circle of learning for the fourth grader

Masahiro WATANABE* · Yuki NAKAMURA** · Shinji AKASAKA***

ABSTRACT

In the present, making a class group in which members' relationships are kept well is the most important education problem. The purpose of this study is to discuss the effective teachers' activities for forming the friendly class group. As a result, in the class of fourth grade students of elementary school, it has been suggested that using the "Cycle of Learning" which starts from "Settings of goal", via "Activities", "Reflections" to "Generalizations" affects increasing school life satisfaction of the most class members.